

湾岸戦争報道 (メモ)

川崎 剛

「Are we going to do~?」。ん？前は律儀に「Is the United States going to do~?」というので感心していたのだが。米務省 2 階の会見室で、前列に座る AP 通信や 3 大ネットワークのアメリカ人常連記者たちの態度が変わったように思えた。当時私は、ワシントンの朝日新聞アメリカ総局員で、毎日正午からのブリーフィングを聞いていた。

1990 年 8 月 2 日、イラクが突然クウェートに侵攻して始まった湾岸危機は 3 ヶ月以上経過していた。国連ではイラクのサダム・フセイン政権に対し、クウェートからの撤退要求や経済制裁など 11 の安保理決議が積み上げられ、次はいよいよ限定的な武力行使容認決議が視野に入っている。ベトナム戦争以来といわれる大規模な米軍の陸海空戦力が、サウジアラビアとペルシャ湾を中心にしたクウェート戦域に集積されつつあった。

大規模に軍隊を動かし、他国を攻撃する準備は、多くの国民の支持がなければできない。そのためには、相手がいかに邪悪で、武力制裁に値するかという敵のイメージが国民に共有されねばならない。AP やテレビネットワークの記者たちの主語が、「the United States」から「we」に変わっていくのは、アメリカ社会の空気を反映しているのだと、私たち外国人記者には分かった。

ベトナム戦争は、テレビが伝えた初めての戦争で、茶の間に届いた映像で国民は厭戦感を強めていったといわれる。だが、当時、ほとんどの取材フィルムはベトナムから日本の米軍基地などを経てニューヨーク本社に届けられ、編集を受けて放送されたのであり、数日間の時差があった。

湾岸危機ではイラクがクウェートに侵攻した直後から、米側でブッシュ（父）大統領ら幹部が記者会見すると、中継の CNN を見てい

たイラク側では、当時のアジズ外相やフセイン大統領本人さえもが、バグダッドにいる CNN 特派員のマイクの前で反応。それがまた世界中に中継されるという場面がしばしば起きた。CNN 主催の応酬を、経過の逐一を記録しなければならない新聞は CNN 劇場を報道しないわけにはいかない。今のトランプ大統領のツイッターのように。

1991 年 1 月 17 日早朝、多国籍軍のイラク空爆によって湾岸戦争が始まり、私はその翌週にサウジアラビアに入った。戦争は約 40 日間のイラク空爆を経て、2 月末に 4 日間の地上戦が行われて終わった。その後ベーカー国務長官の中東和平構想行脚が始まる 3 月中旬まで、足かけ 3 ヶ月、私は朝日新聞の「戦争特派員」をやった。

サウジアラビアで、戦争の取材はまったくと言っていいほどできなかった。米軍、英国軍、サウジアラビア軍のブリーフィングが毎日あったが、爆撃機の出動回数や、どこか場所の分からない精密爆撃の映像をみせるだけで、軍は肝心な点に徹底的にノーコメントだった。作戦の情報は極度に少なかった。広大な砂漠の国では、「現場に行く」という取材の基本手法も通じない。多国籍軍に加わっていない国の記者が前線に行く機会は全くなかった。

戦場に行った記者の報告と軍の公式発表とのギャップが広がったベトナム戦争に対して、記者の行動も記事も軍がほぼ管理しきった湾岸戦争。「それについては言えない。なぜ言えないとも言えない。なぜなら、なぜ言えないのかを言えば、それについて言っていることになってしまうからだ」。国防総省報道官の答えだが、停戦後のワシントン・ポスト紙への寄稿で、彼は湾岸戦争のメディア管理を「史上最良の戦争報道」と呼んだ。

1991年の湾岸戦争はベトナムで傷ついた米国の誇りを一時的にせよ回復した。逆に記者たちの誇りは傷つけられたと思う。嘘の報告はなかったが、戦争の真実には肉薄できなかった。その後、アフガニスタン、イラクの戦

争を経て、米軍は、いまシリアでISと戦っている。戦取材は年月を経るごとに難しくなっている。前線の報告がないと、戦争の実態がますます分からなくなる。

(本学非常勤講師)